

見樹院ニュース

O T E R A O N E W

第55号 2011年6月6日発行

浄土宗 見樹院
住職 大河内秀人

〒112-0002

東京都文京区小石川3-4-14

TEL 03(3812)3711

FAX 03(3815)7951

Eメール: kenjuin@nam-mind.jp

[Http://www.nam-mind.jp](http://www.nam-mind.jp)

施餓鬼会のご案内

見樹会総会のお知らせ

新しい伽藍で初めての施餓鬼会です。今年は総代の名取亮さんのお世話で、法要後、講談をお楽しみいただきます。見樹会総会では今後の見樹院と見樹会の運営についてご提案させていただきますので、ぜひともご出席ください。

日時：6月26日（日）

11時～ 受付

11時45分～ 見樹会総会

- ・建設事業報告
- ・見樹院の活動・運営について
- ・今後の見樹会運営について
- ・その他

12時半～ 施餓鬼法要

午後1時半～ 講談

神田陽司さん

神田京子さん

例年はお話、法要—墓参—総会—会食という流れでしたが、今年からは、受付でお弁当をお渡し致しますので、法要前もしくは講談をお聞きになりながらお召し上がりください。

※折り返し、出欠(人数)、塔婆供養のご連絡をご返信下さい。

お塔婆は1本3000円で承っております。

講釈師プロフィール

神田陽司さん

昭和37年、兵庫県尼崎市生まれ。平成15年真打昇進。早稲田大学第1文学部哲学科卒業後、エンタテインメント情報誌『シティロード』入社。演劇担当のち副編集長。その間に神田山陽の講談に出会い、退社して入門。以後、山陽の弟子として正当派の講談を学ぶ。講談独自の「修羅場」を含む本格的古典によって鍛え上げられた歯切れのいい口調を駆使して、レポート講談、新作講談（『阪神大震災』『講談ビル・ゲイツ』など）も数多く発表し、浄土宗に関するものとしては『徳本上人』などがある。

神田京子さん

平成11年、二代目・神田山陽に入門。同13年、師匠山陽他界により陽子門下へ。同17年、二ツ目に昇進。上野本牧亭や新宿末広亭など都内の寄席に出演の傍ら、独演会・地方公演・他ジャンルとのコラボレーション、子供たちとの講談ワークショップ、国際交流活動など、形に囚われない講談関連の会を企画・開催・出演。講談の可能性を広げんと邁進中。他ラジオ・テレビ出演も。明朗闊達で胸の空く講談を開発中～♪

苦しみの側から 真実を見極め希望につなぐ

放射能から子どもを守る宗教者ネットワーク

私が事務局・世話人の一端を担っている、全国の宗教者のゆるやかなネットワークである「原子力行政を問い直す宗教者の会」では、今回の大震災にあたり、各地のメンバーに呼びかけ、寺院、教会、関係施設、個人宅での受入れ先を確保し、子どもや妊婦さんたちに避難・疎開を促しています。全国各地から、多くの方が受入れを表明しており、とくに原発を抱える地域のメンバーは、放射能に対する意識も高く、非常に心配をして、何としてでも逃げたいというメッセージが届きます。

しかし、これまでに私たちの呼びかけで実際に避難したのは数件だけです。行政単位で移動した人々や、もともと問題意識を持ってすでに避難している人々は別として、高濃度が続いている地域でも、多くの子どもたちが止まっています。

眼に見えず、低線量ではさし当たって自覚症状もない放射能ですが、癌や白血病の発症リスクを増大させることは国際的に認められています。そして大人より子ども、子どもより胎児が格段に影響を受けやすいことは紛れもない事実です。

何が何でも原子力を推進しようとする国や経済界は、因果関係の証明が困難なのを良いことに、放射能は健康に影響しないという大宣伝を行ってきました。チェルノブイリやイラクで活動するNGO等の報告や研究が無視され、子どもの避難や防御の対策が行われなかったことにより、数年後の悲劇を覚悟しなくてはならない状況が続いています。

私たちは、国策と利権、繁栄と便利の前に取るに足らない犠牲として押しつぶされてきた、被曝労働により命や健康を失った人やその家族と接し、先天性あるいは晩発性障害を発症した子どもの親の声に耳を傾けてきました。力の側に立つのではなく、苦しみの側に寄り添い、その視点からこそ真実を見極めることができ、正しい道が示されるのです。

日本では、健康被害の事実が伝えられず、調査も行われず、国と企業から莫大な研究費を受けている「御用学者」を動員して、「安全」と「必要」が刷

り込まれてきました。一方、欧米では乳児死亡率や小児癌の発症率と原発との関係が疫学的に調査され、公開されています。ドイツが原発廃止を決定するのも、市民がそれらのリスクを合理的に評価し判断する下地ができているからこそです。

日本では、この期に及んでも正確な情報が伝えられず、「すぐに健康に影響することはない」という「公式」見解に縛られます。今回の私たちの呼びかけに対して、「国が大丈夫と言っているのに、不安を煽るようなことは止めてほしい」という反応が返ってきます。お上の発表に異を唱えると「反原発」＝反体制＝反社会的とみなし、避けるようになります。これはブッシュ大統領が9・11の後、「正義の側につくのか、テロリストの側につくのか」と問いかけた「対テロ戦争」と似ています。

「反原発」というレッテルを貼り、今、皆が困難に立ち向かっているときに、政府の言うことを聞かず、この機に乗じて自分たちの主張を通そうとしている輩というイメージが刷り込まれます。子どもが学校を休むと、「そういう（思想の）側の人なんだ」と見做されてしまうという恐怖の方が、放射能の不安にまさる社会になっています。

このことから、原発と戦争は同じ社会メカニズムの上にあると言えます。誰かの命が犠牲になることを社会が許容することで成り立つという面でも同じです。巨大な力で押し潰されようとしている小さな命の地平から社会を見極め、正しい情報をもとに自ら考えることを訴え、「安全」と「必要」という“神話”を操るカルトから人々を解放し、子どもたちと未来を守らなくてはなりません。

私たちは、これまでの運動の力不足により、原発を止めることができず、今回の大惨事を招いてしまったことを心から悔い、申し訳なく思っています。そして、これから否応なく、5年、10年と経過するなかで、放射能の恐怖と向き合っていかななくてはなりません。その時に、人々の苦悩と不安に寄り添い、希望ある道筋を切り開いていかななくてはならないと、今、誓いを新たにしております。

以上、「平和を実現するキリスト者ネット」の依頼により会報に寄稿した文章をもとに加筆しました。